



增補  
繪抄  
和字功過自知錄  
全

9  
39









不能不爲己所行日自知而自能戒移皆由省身正  
心哉誠欲踐善行道者舍此復何求也其言云爲善  
者獲福爲惡者罹禍是天之定理宜然也會子曰出  
乎爾者反乎爾者也孟子曰禍福無不自己求者則  
善惡已之所出而禍福反得于己也則無非自求而  
得之矣由是觀之爲人除害救患者已遠凶孽育生  
戒殺者享福祥也世之求富貴利達者亦不由是道  
何以得志乎今也人知取之爲取而不知與之爲取  
也且不悟貨悖而入者亦悖而出之理貪吝頑忍唯

貨財之營而鮮有恩恤也儻此書得博行于世而人  
人受持信修孜孜日化家以及鄉延達邦國則廉恥  
之風興而謙讓之道立富者知足而窮者安生國無  
偷盜而民德歸厚雖姦邪殘賊之人亦有恥且格焉  
嗚乎其功偉然不亦大乎余嘉慕之問其述者姓名  
不顯言之蓋此紀藩世祿達官之士而今既致仕其  
爲人也遜謙不好聲聞資性慈惠常散財布恩以周  
人之急因思吾財也有限而乏者也無限以有限隨  
無限難也已不若使入遇惡修善避禍致福自享天







明の素了凡  
と一人もい  
まぶしけれ  
悟識  
の空あり  
ある時  
と  
の寺に  
のりし  
老人出  
日  
を物  
哀  
と  
中



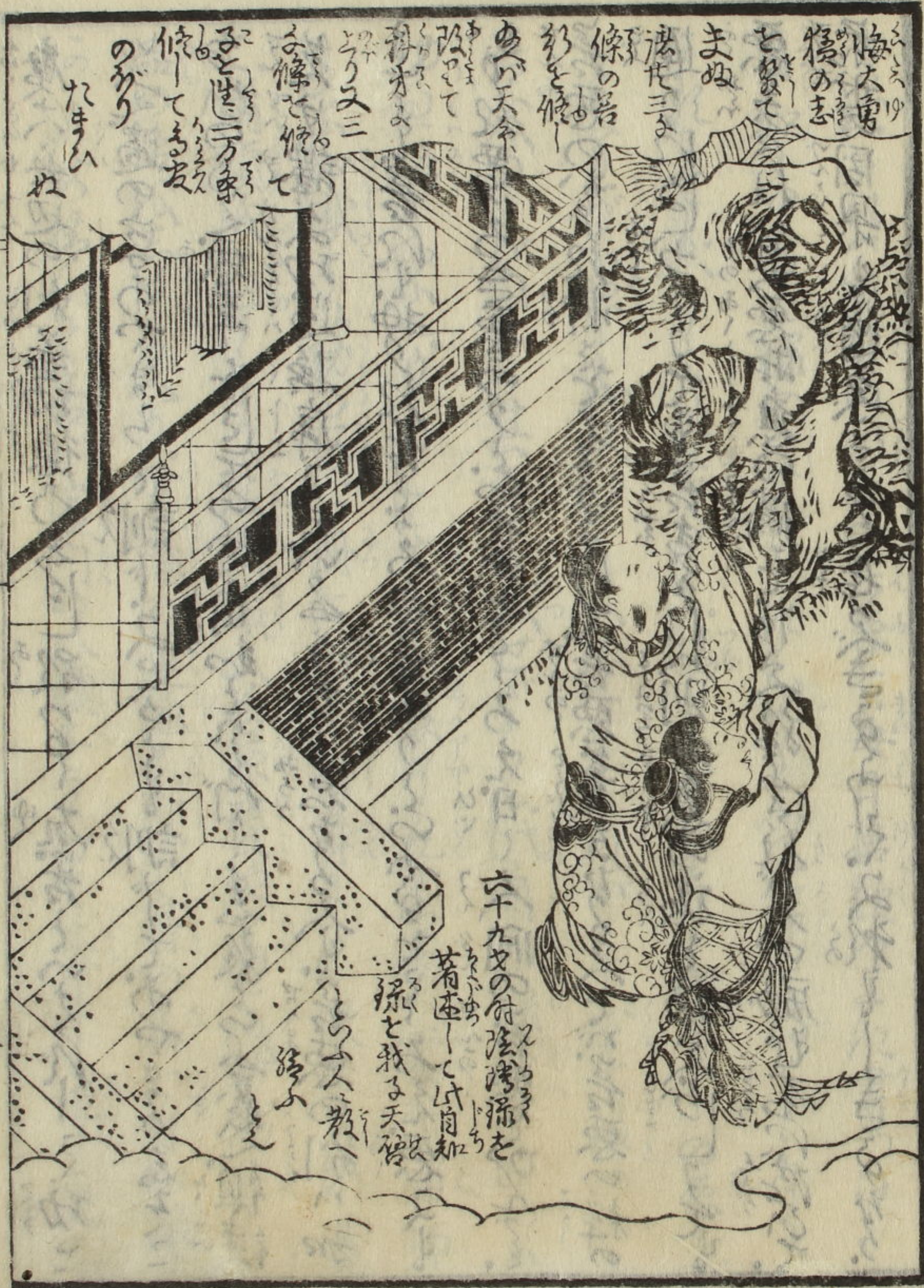
九十一石又牛  
只一人の  
又十三又八月十日  
母の社令統  
と  
毒  
し  
瓜  
其  
又  
一  
が  
款  
み  
争  
し







南嶺の棲霞寺よ  
て雲谷禪師と訪ふ  
あり三日三夜  
法門を講ずる所  
雲谷後師を奉  
の学と修き  
聖地皆おのほり  
天命も又己より  
定ちらふ三層と海  
激勸あひは自叙  
縁と掛けあう  
教とすて  
忽ち多と  
道を



悔大勇  
後のみ志  
と發て  
まぬ  
決其三  
條の旨  
初を條  
あつ天命  
改つて  
初が  
より又三  
子條を修て  
子と世二方  
條しても友  
のあり  
たまひ  
ぬ

六十九の付法流痛を  
著述しては自知  
縁と我子天啓  
よ一人の教  
終ふ











○善道をさぐる一人と利益と一書 ○一方と利益と一書

○天下と利益と一書 ○天下後世を利益と一書

一 國王の津按をまわりそむる一書

○九一切のゆゑ美言はして欺くゆゑ一書

一 師匠の年長より方人おれ久しやう一書

○師のよれをへとまわりてそむる一書

一 兄をうやまい弟を愛を一書 ○異父母の兄弟一書

仁慈類

一 かりに疾を救ふ一人

○かりに病を一人 ○薬をやどる一人

○縁の病人をほさる一人

但し禮物をうくる者あり

一 犯罪又ゆる者へのちをさる一人

ゆゑさる一人 ○杖刑をさる一人

但しまへといへば又禮物をさる一人

○義理のきりやうに私をさる一人

一 子と溺るる人とを救ひし一人

○子をさるる人とを救ひし一人

○棄子に育つ一人

一 牛馬等の人をさるけりの命をさる一人



○猪鹿雁いのししうしかぎしなどの命いのちは蓋ふたなきもの命いのちをとり一命ひといのち 十善じゅうぜん

○魚雀うしとせう乃すなはたらひちへときりの命いのちをとり一命ひといのち 一善いちぜん

○細くまうなる魚うしとせう蠲あうりう駮あぶ駮あぶなどの物もの殺ころむる命いのちをとり一命ひといのち 十善じゅうぜん

○一切いっさいの若根わかしの物ものの命いのちをとりよすよりよきとせし殺ころすは

當あたてたる一命ひといのちの殺ころすは又またの禁制きんせいとすべからず

ちへとき命いのちをとりよす若わかし多おほしと押おしのいりなりちへ

また命いのちをとりひえ大命おほいのちをとりいざ殺ころすのい押おしの

後あとをむさかりて物ものとあひれむ心こころなきあま若わかしなり

あうにさうさ何なにをいを押おしす大命おほいのちをとりよすもの

い押おしくれまうく微命わいのちをとりよすは若わかしなり

一 蛇へび嵐あらしなどの物ものは害がいあるもの命いのちをとり一命ひといのち 一善いちぜん

蛇へび未みど人を咬くはむる殺ころすは罪つみはし嵐あらしの害がいとては

命いのちをとり後あと乃すなはち罪つみあり

祭まつりふるまひなどれ加例かれいは生なま殺ころすとりて殺ころすと殺ころすは

市いちは賣うりててかりり

獵師りやくし狩人かりう殺ころすは罪つみありの殺ころ業ころしをいへたれよと

とむ心こころ三善さんぜん ○過あやまちと悔くひかたうを改あらむと若わかし一人ひとり 十善じゅうぜん

一 ぼろとれ人ひと殺ころすは禁断きんたんせしむ一日いちにち 十善じゅうぜん

一 家いへある大おほいなり牛馬うしうまなどの死しするは若わかしかくは

大命おほいのち 十善じゅうぜん 小命こいのち 又善またぜん 佛ぶつなりと若わかし一命ひといのち 九善くぜん



一 巻く子なく物少うして又るき者越してたのむる  
 きんさうじんをとりよ百後 ○まぐりのやごころも  
 積りて百後 ○米妻布本綿の敷上は日く積りて論  
 ○お族中をえとらまじきと固い友ごら乃憲雅と  
 たとけ又我おれえく出入る者よかごころ日  
 ○このおとれた困窮じんをほきゆり一日  
 一人の憂はるる心受くつひなぐさむ一書  
 凶年又米の虫鼠よる利とくは賣出百後  
 饑する人をとりよ一書 ○煩喝する人又湯茶とよ十飲  
 ○あぶえは人をあてり宿せむ一書 ○綿入一書

かごころ二書 ○やこの夜よてちん明松をよごころ一人  
 ○雨ふりよあまをよごころ日  
 ちんけごりのみ食をよごころ二食  
 一かしたる金銀とゆる百後  
 ○年く利長とえはよれ其人のたれことなるけり一書  
 かごころをよごころ二百後  
 但うつへ厭ひたれども滞ありてせひなくゆる一書  
 一級よきまする人まふし人半馬寄の疲るはむとゆ一書  
 或は代りて息む一書



一 葬れをよとらうらうき人みかどこん 百錢

一 捨る人の骨と葬る 十善 ○捨る死骸と葬る 一人

○墓のうき人、墓地をやどじて葬ら 一人

他 年貢をとらうらうき人 三十善

○旧跡の古橋と再興し、或は法界の塔と建る入用 百錢

一 かけしらざらうらうき人 百錢 ○酒池舟戸と扱やと

不火そ、彼束の撈をうけ、後、船を洗る 月

他 賃錢とさりのま、若にあらじ

一 上官みらうらうき人 百錢

○備らありとも、情よありれそ、其後後と令、勅 十善

他 徳徳瓜うらうき人 百錢 ○丸上うらうき人

下をさのぎ、唐ざうらうき人 百錢

一 氏とらんふらうき人 百錢 ○日どく嫁入ととれ 百錢

○常えらる男女を 百錢 ○其代娘と 百錢

○こんきうれ人 百錢 ○愛と 百錢 ○金銀を 百錢

うら 百錢







三寶功德類

一 佛菩薩祖師乃像をくんまうする入用百卷

○ 诸天聖人賢人の像をくんまうする入用二百卷

○ さいじん修羅をくんまうする入用初巻

一 經律論を板紙する入用百卷 ○ 二乘人天の書二百卷

○ 印施百 但しひとをくんまうする入用百卷

一 堂塔寺院を建てる百卷 佛具法器等と寄進する百卷

○ 地を寄附する地代百卷 ○ 诸天若邪の廟社二百卷

一 焼香百 焼香百 焼香百 焼香百 焼香百

一 菩薩の大戒を受る百 ○ 小乘戒三十

○ 十戒二十 ○ 五戒十

大乘の經律論を註釋せば一卷 卷數多くとも

○ 二乗抄十 び人天の書十

卷數多くとも三百

但し己がひがめ見識みまらせするの書及紙

自己に佛法の書と著述せば一卷 卷數多きも二百

○ 世間の教みたる書十 卷數多きとも百

但し人よきことをくんまうするにあらん

主君父母親友法界のためは經とよむ一卷

○ 佛名百 佛名百 佛名百







一 までき物をりしる百後 ○困窮の身合なり百後  
 一 男女の専事つうことに専守まもりてそまらば百後  
 一 人みのりし物物やぶやく紛争まぎ乃す返して時日ときひと過さば一  
 一 人代かみアま借金かりか所ところはくかひ一と百後  
 一 山林田地さんりんてんぢをゆづり佐徳さとくをゆづり何なにも徳分とくぶん百後一  
 一 家業かごふ又またゆづりかくよくはとも妻さい子をきびくをく人  
 争まぎく一幸さい ○内うちのもろけちよ下女げぢよ小者こものまを心こころをほけよくあり  
 とさやうとふふくくくくくくに腹はらをたぐまうくと  
 くくとくてんてんのゆくやうにくくくびもをく心こころ乃すよくく  
 るくくくみみららびびくく一一

一 人をとくめ令恨しんと出でせそく若根わこん功德とく徳とくをまじししはは  
 者ものああ若わ根こん百後百後 但た己おのがおの名なままにに押お付つききむむいい若わににああららばば  
 一 命いのち又また抑おさふふ訟しょうををたたててままむむ十十若若 ○争論しやうろん又また和睦わもく乃  
 授あづか授あづかををととしし一一若若 但た礼物れいぶつをを受うけけるるいい若わににああららばば  
 一 至徳しとくののここととばばをを出でれ  
 ○但た揚震やうぜんがが天てん知ちらら地ち知ちはは我われ知ちるる海うみ知ちるるとと云いふふとと云いふふとと云いふふ  
 一 人の若わ事じをを見みるる我われももままららんん終はるる一一若若  
 ○過あまとと知ちりりてて改かむむ一一若若  
 一 評議ひやうぎ談合だんごうのの席せきをを自みづか分のの了簡りょうかんをを云いひひつつののくくららるる  
 一 理こと乃すよくく一一若若







一肉食する人食を減者せば一食

○常業の人食を減者せば二食

但食を希と力かたして減せば三食にあらん

一穀をその其の肉をうづぐれば一食 ○穀を食して不食一食

○我を御食應たれに穀を食して不食一食

一人より五理なる事とつけてよくめんこと一食

一物らある物をひろひるに代物百錢

一過る我みうけ功を人みあふ二食

一志あひせりたれも悪しきも我分限みやそと天う

まうせくむとがらん十食

一若ん人のふらみなるをたれををりひて我ふらにせざる

一我財産の多ふとも人のまんごを食ふせりめん

一利をりかひのゆるくの愚雅よあふ天と起る人

一とがらびしてまうがひうる

一いけみえをころと等の悪き願ひをとむ

一人の身命と保する書物とゆる

但・禮物を交れと非

をこころにゆるる

一文字の書る紙路に抄してある紙捨ひてほる

一文字の書る紙路に抄してある紙捨ひてほる







一 金銀あり威勢ある人はよくぞたれぬ其勢ひをいせは儉  
 約と守りて言ふやとんごる者 一孝 十善  
 一 權柄威勢はくべきみつうに 十善  
 一 人より悪銀とさげけるは悪銀と知りて外へきりて棄置 三善

補遺

一人乃一命をとりふ 百善  
 一 功過格をへむしむ 一人 又善  
 ○ 人をとりて功過格とせむ 一人 又善

自知録上巻 終

自知録下巻

過門

不忠孝類

一 父母を中わいて致る 一孝 一過 ○ 父母のいふをきうに 一孝 一過  
 ○ 父母をいりて後入母の道がまはる 一孝 一過  
 ○ 不忠孝をいへば善いとす 十過  
 ○ 父母の忠孝し給人物とす 十過  
 ○ 父母の忠孝し給ひをせむ 一孝 十過  
 ○ 父母のあやまちありあつ心をそしめて誹むべきを誹め 一孝 一過  
 一 繼父母 養父母 祖父母 舅姑等 一孝 一過

古杭雲棲寺 殊宏 輯







○人ぬらうとせむ 一命

一牛馬等の人に害をなせばけりもろとせむ 一命  
二十造

○あやまりてころすと 又造

○人又蓋ふさけりめとせむ 一命  
十造 ○あやまりてころすと 二造

○ちいさなけりめとせむ 一命  
一造 ○あやまりてころすと 十命  
一造

○ちいさく殺畜と殺 一命  
一造 ○あやまりてころすと 二十命  
一造

○人にころすとせむ 一命

○人のころすとせむとせむ 一命  
一造 ○あやまりてころすと 一命  
一造

○けりめとせむとせむ 一命  
一造 ○あやまりてころすと 一命  
一造

○律どまりてころすと 一命  
一造 ○薬餌に殺と 一命  
一造

○強姦を中へりてころすと 一命  
一造 ○あやまりてころすと 一命  
一造

○蛇蝎等の人ぬ害あるけりめとせむ 一命  
一造

○あやまりてころすと 一命  
一造

○人の殺生とせむとせむ 一命  
一造

○止むるをちりてころすと 一命  
一造

○たぐりてころすと 一命  
一造

○て死にせむ其肉を食ふ命 十造 小命 又造

○せむとせむ 一命  
一造

○ひそくに殺す 一命  
一造



一 食物よりさへ其のものを煮らばしやきらばして心どき  
 けり一と云ふ一命  
 一 獲ちたてらば心をけり魚は物も多し其れはひて  
 死せぬ一物  
 一 虫のさすなりとあぶき糸とて押さるし宛をうつも  
 窠をこぼら卵をまらめれとやぶる  
 一 但しとてつて踏みはくり寺院を塔にせん  
 一 ともどりくく乃昔のまをたぬ五捨らば  
 一 らは遣にけり憾悔退後とて  
 一 ちを籠み入る中一なりとて一も一日

一 生らふりの死をさるるはしとて後と抄こる一  
 一 宗族をばし朋友よりたのむるなき困窮の人乃飢え  
 一 心とて心とて一人  
 一 但我身なるをまづしをい遣みあはれ  
 一 賢人はんが病人愚人老人小児を嚙食しそこなる一人  
 一 人の憂えげきをさるるひるるる一遣  
 一 一とて二遣  
 一 一人此利を失ひ名をけりあつとて心はゆるる二遣  
 一 一人乃常るとして好む悪て抄らぶること其れ一遣  
 一 凶年に事なれりて人を救はれりて事なれりて一遣



○人の夢をともむ 一

○多き人より少き物を強く押へて其人衆人と行ふ 一

○人をよぶ及び牛馬を扱ひつゝひくくびと服はつゝ 一

○茶を飲む 一

○人を扱あがき人の背をとつ 一

○人の洗つをつき 一

○權威をのり 一

○日く強て下変 一

○とどろろ瓜換 一

○橋渡 一

○上の級人 一

○法をまげ 一

○とれあ 一

○婢妾 一

○人の妻女 一



三宝取業類

一 佛がまのる像ぞんざうをこたひやぶる二百錢百錢

○ 诸天しよてん菩薩ぼつだつ聖賢せいけん君子くんし等の像ぞうを一百錢百錢

但 邪法じやくぽう邪律じやくりつなりは遣一は遣一

一 佛がまの羅漢らかんを一遣一 ○ 诸天しよてん聖賢せいけん等一遣一

○ 他人たにんのまじいととくしんじゆ冥冥めいめい冥冥めいめい出しる一遣一

佛ぶつを一遣一 ○ 佛ぶつを一遣一

但 病びやう等らうの一遣一 ○ 病びやう等らうの一遣一

○ 酒しゆ等らうの一遣一 ○ 酒しゆ等らうの一遣一

○ 齋さい日じつの一遣一 ○ 齋さい日じつの一遣一

但 六日ろくにんを一遣一 ○ 六日ろくにんを一遣一

小の月こづきを一遣一 ○ 小の月こづきを一遣一

一 寺院じゆん堂どう塔たつ瓜かを一遣一 ○ 寺院じゆん堂どう塔たつ瓜かを一遣一

但 佛ぶつ具ぐ法ぽう等らうと一遣一 ○ 佛ぶつ具ぐ法ぽう等らうと一遣一

○ 佛ぶつ具ぐ法ぽう等らうと一遣一 ○ 佛ぶつ具ぐ法ぽう等らうと一遣一

○ 佛ぶつ具ぐ法ぽう等らうと一遣一 ○ 佛ぶつ具ぐ法ぽう等らうと一遣一

但 邪じやく法ぽう淫いん祠しの一遣一 ○ 邪じやく法ぽう淫いん祠しの一遣一

一 三さん宝ぼう地ち心しんを一遣一 ○ 三さん宝ぼう地ち心しんを一遣一

○ 三さん宝ぼう地ち心しんを一遣一 ○ 三さん宝ぼう地ち心しんを一遣一





命とある一命  
 食物は川魚や煮ころ  
 ちりや焼ころしに  
 かへつむらねきさうけ  
 一むらねの造は一倍

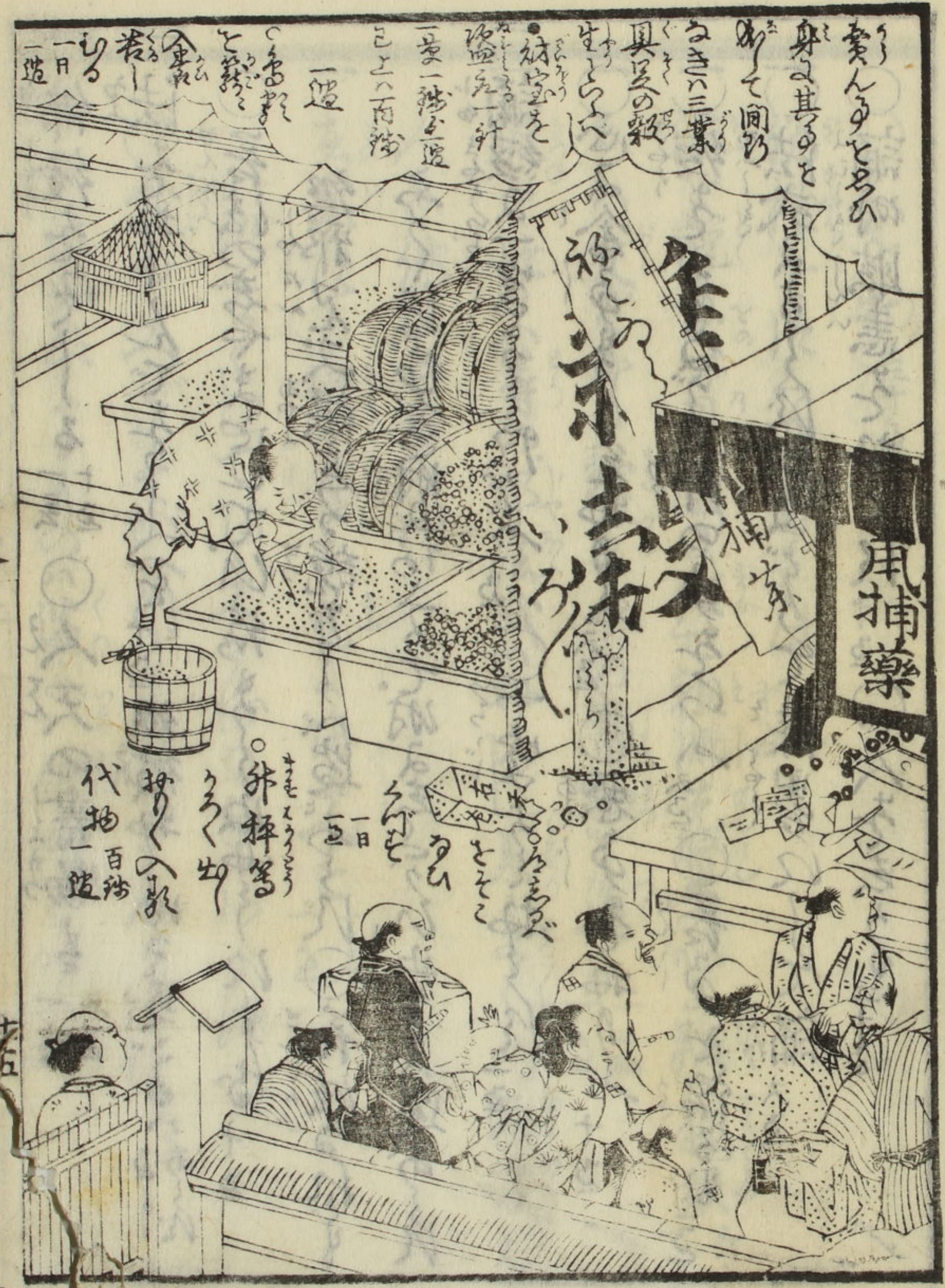
〇人々  
 あか  
 けりあう  
 一命  
 一命

後日口  
 心よ

後日口  
 心よ

人々  
 ちりや  
 焼ころし  
 かへつむらね  
 一むらね

〇人々  
 あか  
 けりあう  
 一命  
 一命



身と其のと  
 ぬきの三葉  
 具足の穀  
 生るる  
 材を  
 盗を一汁  
 一盗  
 一盗

用捕薬  
 神  
 ぬきの三葉  
 具足

〇人々  
 あか  
 けりあう  
 一命  
 一命

後日口  
 心よ



佛經をそしる一云 ○人天の書物一書

法を押しんでを一云 ○但彼押ゆるは是なる一云

○若法の善やまじしてい後まうぬやうにまは一云

但邪一云又誤一云する説一云するは造一云あるは一云若法一云を一云

ふくはむむき附一云はうりて附一云又まうい止一云まるは造一云あるは

誦經一云又一字一云よむたが一云 ○一字一云よむ押一云は一云

○心一云よ余一云のま一云を押し一云入一云 ○悪一云を押し一云入一云 十一云

○經一云をよむ一云がう外一云の一云を一云を一云 ○若一云の一云と信一云るも一云

○法式一云より一云に一云ある一云より一云て一云兼一云累一云にして一云誦一云入一云

○誦時一云眼一云志一云を押し一云入一云 十一云 ○人一云を去一云る一云 二十一云

○人を打一云 三十一云

佛經をたうり著一云は一云 一一云卷一云

法と説一云まじが見識一云又一云但一云せ一云祖師一云先賢一云の心一云又一云教一云の徳一云衆一云人一云

ら一云の文一云が中一云り一云勢一云を一云の書物一云と造一云る一云 一一云篇一云

純一云を一云たう一云等の邪法一云或一云は押し一云し一云兼一云まう一云乃一云悪方一云を一云

人一云は佛一云ある一云 一一云方一云

在家一云に一云僧一云の食一云を一云を一云よ一云あ一云へ一云と一云 一一云人一云

但一云ち一云く一云して一云あ一云へ一云入一云る一云は一云ま一云は一云ら一云は一云

○食一云あ一云へ一云と一云が一云は一云く一云ま一云う一云り一云を一云あ一云へ一云と一云 三一云

但一云出家一云する一云もの一云は一云造一云み一云一倍一云小一云く一云り一云















○らんくまは論のじし抄と一造

○人の親子兄弟等のいじごを不和のまゝ 三十造

○人の縁組をとまへん 一造

但縁組とてうごまけあへば造又ありん

一 徳を捨てる言ひ知と 一言 十造

但曹操我が人をもくた人我をもくたをいふに

一人をたぶらふをそと徳の 一造 ○それあま又害せば 十造

一人の善悪をくつりて 一造 ○適あれどもあはれ 一幸 一造

○造とせり諫をきくべし人の心くはるまゝ 二造

但父母を君師と等のうへに對せば 十造

一 お後み抄のまがもつとついつのりて人のよれたる簡は付と 一造

一 女房子供とをへららびとよらうぬりをもとぬも

とどめば 一造 ○家来男女とも 一造

一 大賢みの師とせば 一造 ○勝るは友ある我まらば 二造

○うへく毀あつる 十造

一 同らの術方とてしつて悪口と云 十造 ○日暮 一造 ○下暮 一造

○聖人 百造 ○賢人 君又 十造

一 人みをへく不若なるに 一造 ○人又不忠不孝等の

大悪とをへく 一幸 ○人の不若と見て誅せば 一造

但其人我まらうてきて誅まらばと云へば造又ありん



一 ち中り教を造りて人み挿號をさへんれ一人

一 うそい一言 ○自ら恥めけりや悟りて人と惑り一言

一 約半所負く小更十造 大幸 ○寄託する財百積

一 恩をうけて教せ一造 ○寛ある瓜るるらば教一造

一 へうとて寛と教どはる一造 ○下一造

一 我みう一造 ○ある人の喪滅一造 と縁がひ思ふ一造

一 肉食一食 ○くらす一造 肉一食

一 但市一造 買求めて食ふと謂之若自ら殺して食

一 を茶の殺せの中一造 論一造

一 酒をのむ一合 ぬ者一合 のむ一合

○よろぬ者とのむ一合 ○ぬ者一合 のむ一合

一 樂母の中一合 のむ一合 病を療

一 酒者を商一合 人一合 とよびら一合 ちて一合 のむ一合

一 五等一造 とくら一造 ○食一造 して一造 後一造 誦經一造

一 けし一造 も一造 日に肉一造 と食一造 ○食一造 して一造 佛殿一造

一 みのぼる一造 ○酒との一造 幸一造 とくら一造 みの一造

一 三分一造 の英一造 腹一造 英食一造

一 從父母一造 なる一造 遺一造 あり一造 其外一造 佛神一造 供一造



物として身みの分限ぶんげんにお慮おしやうせざれば此こゝの奢しやうめが

米麦こめむぎをにじめ五穀ごこくの天あまの代物しろをまじりて代物しろ

殺生ころし將妻しやうさいの道具どうぐと商あきなひひの賣うりあつて代物しろ

ひろひつたりのをまじりて代物しろ

功こうあれば母ははのれがまじりて道みちはまばふぬり付つりも乃なり

歎なげ心こゝろは種たねくのもくもりて此こゝ義取ぎとるれり月つきを

衆しゆいもどつてまじりて衆しゆのあを

りぬりの居ゐ居ゐ居ゐの地ち一日いちにち

人ひとの財産さいさんをうしむるはぶれるもちよりに我われいと

可べ換かをせばおんまんとん

一 利りをうしむひよりうくのちんぎよあふ時我われあやま

ららを思おもひ神佛しんぶつをうしむ人ひとをどぐ心こゝろ

一 文字もじけある紙抄ししやうをうしむるがまじりて

一 何なにく銀ぎんと知りてはうふ

補遺

一 香かうを供くひ地ちと掃はきひ佛ぶつと拜まがせざるふ妾めかけの堂どう壇だん

のよに登のぼる ○伽藍がらん殿堂だんどうのよにて魚肉ぎよにくとくらふ

一 礼物れいぶつをうして諸般しよばん人ひとをまじりて人ひとを立た身みさせ又またの

衆しゆをうろくぬやうに世話せわなをたふす

○何なにどく人をまじりて人ひとを衆しゆとせしむる等らうの世話せわ











一 け功過格と修せん人も我忠く信仰と信佛  
 神の御業とて今までの悪業と懺悔し一心  
 二 祈誓と受け祈ふ所の事をやせ祈願を  
 扱其報恩み先三十の善行なり多神佛  
 の御恩と報せんと祈ひをなすべしとて其日  
 より本文ある教く乃善行と考へ我力  
 する所の善根をなす毎日寝とまに一日の  
 善と悪とを格致み書付る扱毎月朔日  
 二 神佛の御業にそ奉る月乃善悪と扱  
 善行とてたて人を悪を三つとて善

を三つとてれば彼悪もきゆれなり善を又三つ  
 善なりとも悪と又又三つ善なりば其善いむし  
 きなり十の善行もはとも悪と八つとれば  
 幾よ二つのことなり善を一つ善なりとも三つ  
 みたりる善行れば三つにたりぬ又三つあり  
 善なるべ又三つとてなり乃至百にたりる善行  
 ば二つとて百なり悪も又かく乃とて  
 本文あるにぞく兼用して三年又三年  
 七年十三年のうちに三千の善根と圖満  
 とて心ばし人善実なれば三千の善い



然就せざばうらにまが祿がみゆいなるのみなり。  
 け三子の若も、祿佛への報恩なれば、報ひうま  
 ひく後いよく、勵こくとも、やうふ三千の報  
 を満とべし。三千の報満とすべ、知識を  
 たのし、回向を法とむべし。  
 一、袁了凡云、予雲谷會禪師より受ひしとき、  
 禪師云、天命い己より他たべし、一切の福も  
 福も己よ求むべし。若生の定まれる天命も  
 今生己が不修ふよ、天命忽ち變と。  
 我の福をわえ、あつひも福をほこふをうり。

我身の修ひの苦要の外、別な天命を論じ  
 ぶ、功造格一冊を授け、後、来乃  
 罪を懺悔し、苦根を修ひ、うらたこ、れも  
 懺悔と第一とし、よく心を活れ、ことと教へ  
 給へ、平深く信受し、毎まげ折、教と立  
 て、三千の苦修を修し、たれば、及、第の大願  
 を成就し、又三千の苦修を修し、たれば、我  
 變して子孫なき、又相たれ、も、則、天啓と、いふ  
 男子出生し、一萬の苦修を修し、たれば、實地  
 縣と、いふ、の、なり、修、り、五十三歳の



命厄とありしも七十歳に於てはつゞ  
たうらむかり。是令く心海ありて願心堅固  
かたはあふれば功過捨と修飾して明德と明  
くふと人幾百人富貴幾る家とありしを  
あふて天堂も地獄もけ秤量し毫厘も  
たがふらむ。此功過捨とありて造化の  
とありて禍をのぞいた後をあらたしむこと  
律のむらと云

此功過捨疾いりてをさるら我の愛よ令字と化  
し。銀字と化ととんく兒女の子をまらうを

其外靈驗奉てうぞ人の

一日の中りて十余功の若くを納ひ積ん  
て月々あるまで純心よあし退屈なく法と  
むねとれたる本等の功の外は別は加えく  
十功とあるはなす。是も純善は貴び精進  
の一功を大功ととれことをあつらんもの  
なり。このあり其間も抄ひく一兩日も  
怠と存ことありば月々つらても別  
功をあらはなう。一日十功ならしむ  
月々又増を記ととれた。一月は三百二十功と



ある又一ツとして十功二十功にもあらず若  
 あれば一奉よき又六千功にもあらず若  
 こり功積むこと其申とて志すも悪  
 むの方をも又嚴重し。微し乃過をも  
 らば志れとて一若功を記しよまはまび  
 らふし一過悪を志ふとこと功怨とて  
 一若功積むこと其申とて金銀と買  
 ひはひやとるなき由人賣しとて穢の男婦乃女  
 までも好より安きゆかり

一 自君父母もよく若くを好むし一若くは十  
 若くは他人も勅むる一若くは君父の我よ  
 立て我を輝んど人なる由人勅記し一若く  
 他人の勅記し易きゆかり  
 一 元惡逆無道の抄るひ其嚴重くして量れざる  
 一 一書をよむく受持とふかどの人柄  
 一 入べきりにあらずゆへに此書又載せざ  
 一 蓮池大師云功過格の利益も現在の華報  
 一 ともどもとるら来世の果報とちりて功徳  
 一 とうはべり



一 本文二百銭を以て一善として一過とを以て  
 あり。祖徳先生云。永樂銭百文にして。今乃  
 後にして。又百文より少く也。或は宋表猪紐  
 布毛綿文など。紙出たり。代物の重値は  
 兼用を以て  
 貴賤僧俗等のまうらひより。若悪の條  
 通用し。びたりのままづらひ。きと恐  
 累る。悉くれども。善門過門の八類。本文乃  
 次第に。順じて。行。まんで。これを。譯。とい  
 う。そ。も。私。意。を。添。加。せ。ぬ。や。う。若。悪

の。輕。重。實。に。天。石。の。淨。定。め。た。り。ゆ。り。そ。う  
 み。か。り。よ。る。う。じ  
 功。過。格。紙。受。持。を。於。人。の。毎。日。此。書。を。見。ん。と  
 日。の。功。過。明。ら。う。に。記。さ。す。若。け。書。み  
 淺。く。は。う。ら。う。例。を。引。て。記。さ。す。一。月。の  
 卅。日。み。善。過。と。お。くら。ぶ。多。少。を。見。奉。の  
 終。り。兼。用。し。て。知。は。る。し

格目之圖











如美をけりふか多無乃若ふ一とれ中も思と自能違し  
君八自れりてはるるはれ小実跡老幼をいとけり理と  
きし知れり只をるふ所國を報をまぬれも  
功過自知録世に行ふ事あり今年書被れ  
富み應一奉詔に據て言わく増南校訂ありと  
國馬加し幼書稚子乃啼と也弄公と又母を  
しつたの川と魚と懸し善く勸ふは一懸ふ傳ふ

寛政庚申正月

沙門源無識



安永五年丙申二月原刻  
寛政十二年庚申九月再刻  
天保九年戊戌正月重刻

日本橋壹丁目

江戸書肆

須原屋茂兵衛

高麗橋壹丁目

浪華書肆

播磨屋九兵衛

心齋橋通唐物町

同

河内屋太助



